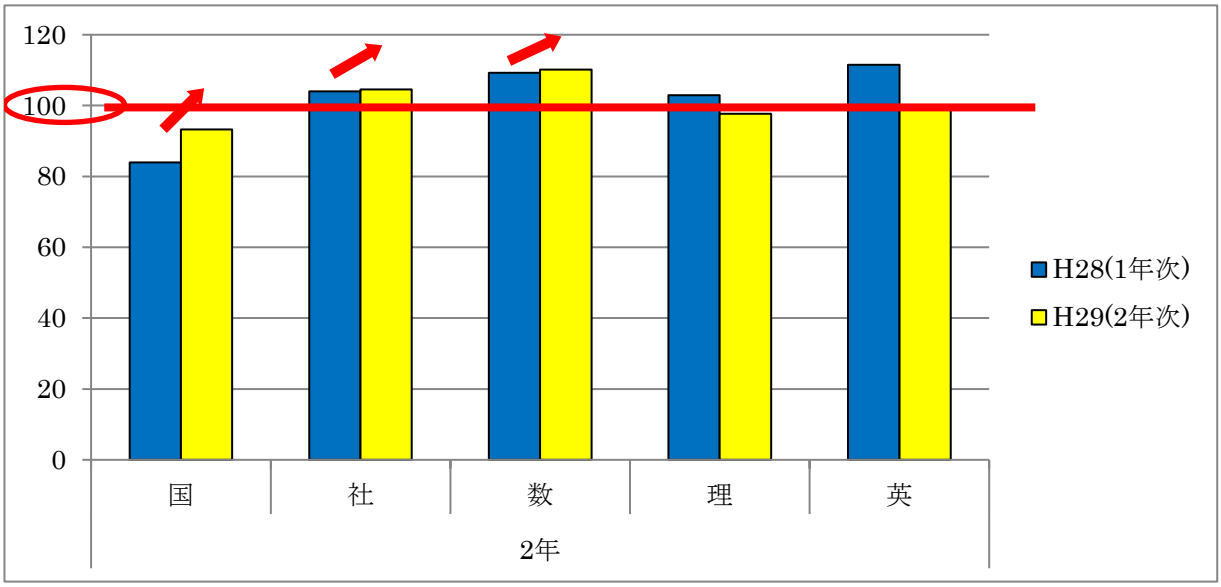
Ⅲ　成果と課題

１　研究の成果

(1)　仮説１について

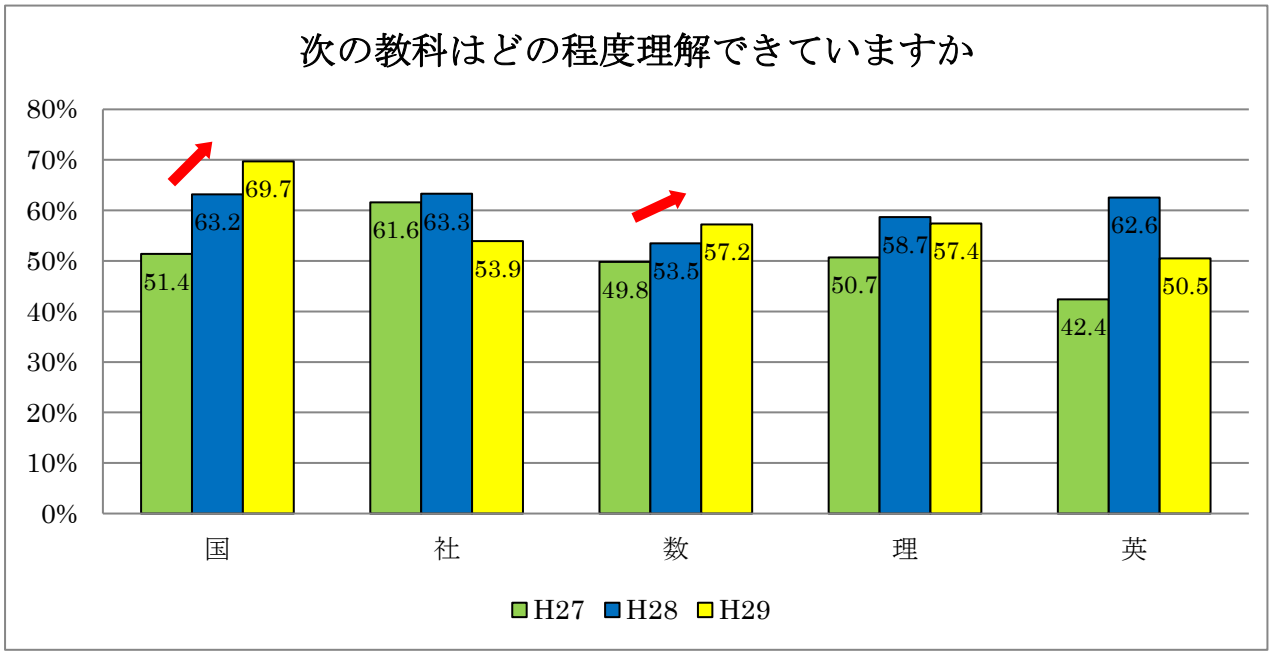
仮説１　基礎・基本の定着を図り，学び合いのある授業，授業終末の振り返り，ＩＣＴの活用などの工夫を行えば，すべての生徒が「分かった」と実感を伴って理解できる授業ができ，生徒にとって学ぶ喜びや学びの有用性を感じることにつながり，学習意欲の向上ならびに学力の向上が図れるであろう。

○　熊本県学力調査から



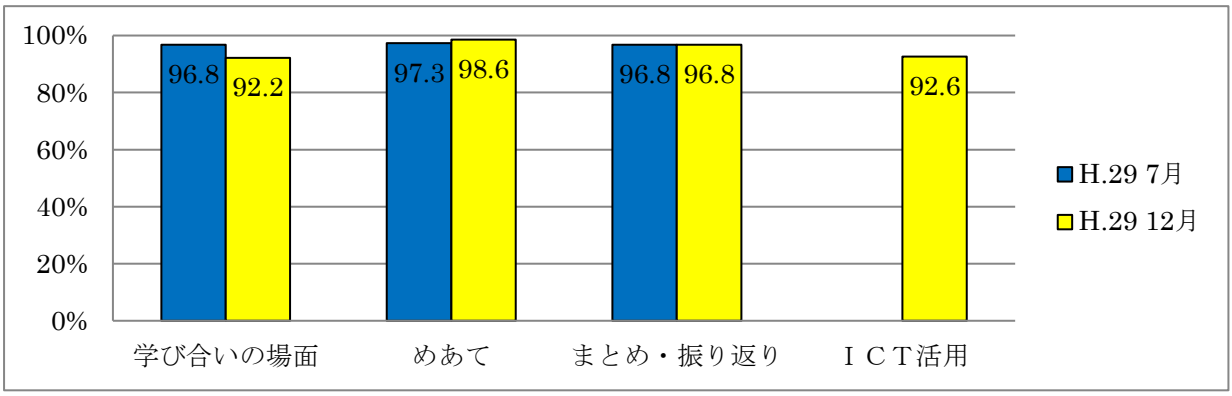
１２月に実施した県学力調査の県平均の定着率を１００としたとき，現２年生の定着率は，３教科（国・社・数）において，伸びが見られた。国語においては県平均には届かないが，差は縮まった。

○　県学力調査生徒質問紙から（学校全体）



１２月に実施した県学力調査生徒質問紙の結果は前ページのグラフのようになった。各教科の学習で理解できていると感じている生徒の割合は昨年度の結果よりも２教科（国・数）で上昇した。ここ数年の課題であった数学において，全国標準学力検査（ＮＲＴ）の偏差値も上昇傾向にあり，２年連続上昇したことは大きな成果と考える。

○　学期末学習・生活に関するアンケート結果（生徒）から



今年度７月と１２月に実施した学習・生活に関するアンケート（生徒）の結果は上記のグラフのようになった。「甲佐中　１時間の授業の流れ」に沿った「めあて」「まとめ」「振り返り」と「学び合い」の学習活動が９０％以上で，ほぼ毎時間の授業で実施されていることが分かる。また，ＩＣＴの活用（１２月のみ調査実施）においても，各教科の授業で活用がされていることが分かる。

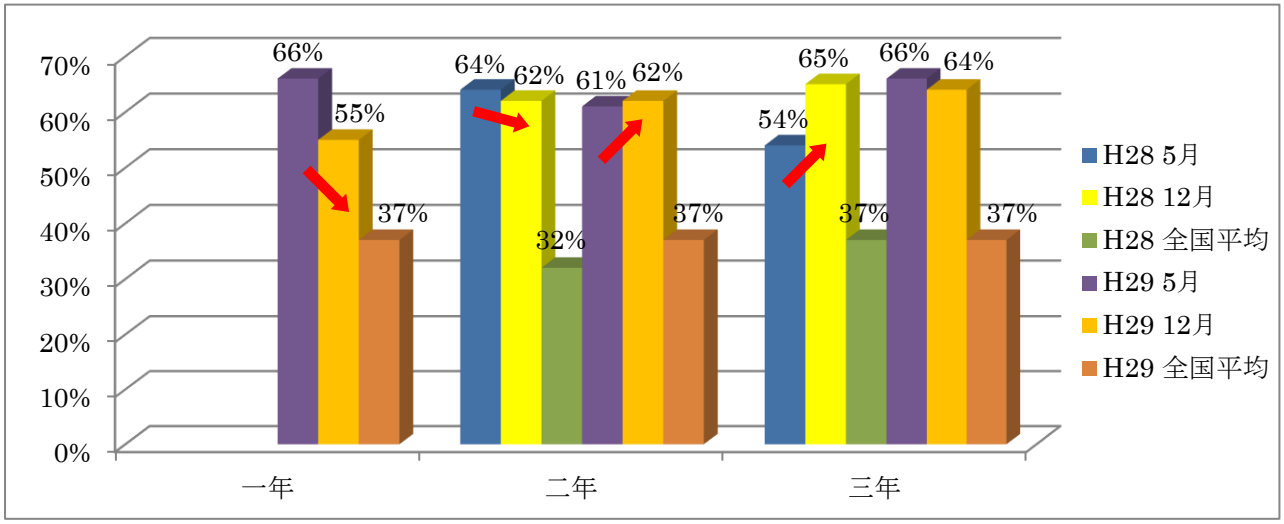
学力充実に向けた共通実践を，全職員が同一歩調で進めることができたことは大きな成果と考える。

(2)　仮説２について

仮説２　hyper-ＱＵを活用し，よりよい人間関係を形成する取組を意図的に行えば，ルールとリレーションが定着し，生徒同士に温かい人間関係や信頼関係が形成され，お互いに学び合い，高め合う学習集団が形成されるだろう。

○　hyper-ＱＵ結果から

hyper-ＱＵでは，学級生活への満足度が示される。前年度からの調査における満足度の指標は下記のグラフのように推移している。



３年生については，２年次（H２８，５月・１２月）に満足度が５４％から６５％へと増加している。これは，基礎学力向上の取組（甲佐カップ基礎テスト）において，「全員でテスト勉強に取り組もう。」「全員で満点をとろう。」という目標を掲げ，学年部の職員と生徒が一緒に休み時間や放課後の学習に取り組むなど，一つの目標に全員が力を合わせて取り組むことの効果であると考える。今年度は，ＳＧＥやＳＳＴを取り組んだことで，それぞれ６６％（H２９，５月），６４％（H２９，１２月）と一定の満足度を保つことができている。

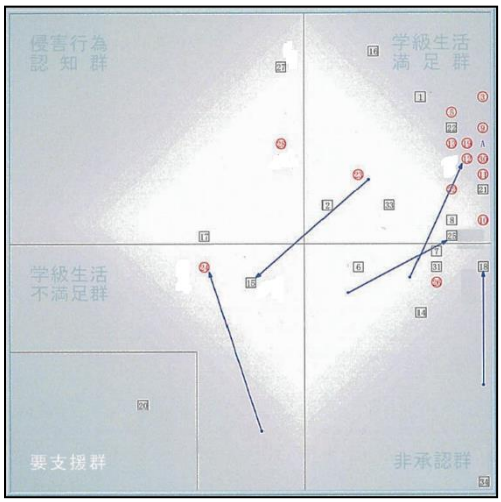


図８　２年生の学級満足度尺度の変化

２年生では，今年度の５月と１２月を比較すると，満足度が約１％の微増となった。右にＱ－Ｕ活用部会の取組で紹介した２年生の学級について，学級満足度尺度の変化を示すと，非承認群から学級生活満足群へ大きく移動する生徒（矢印の生徒）も見られた。ＳＧＥの取組が生徒のリレーションを確立し，学校生活に意欲を持って取り組む集団づくりに寄与しているということがいえる。

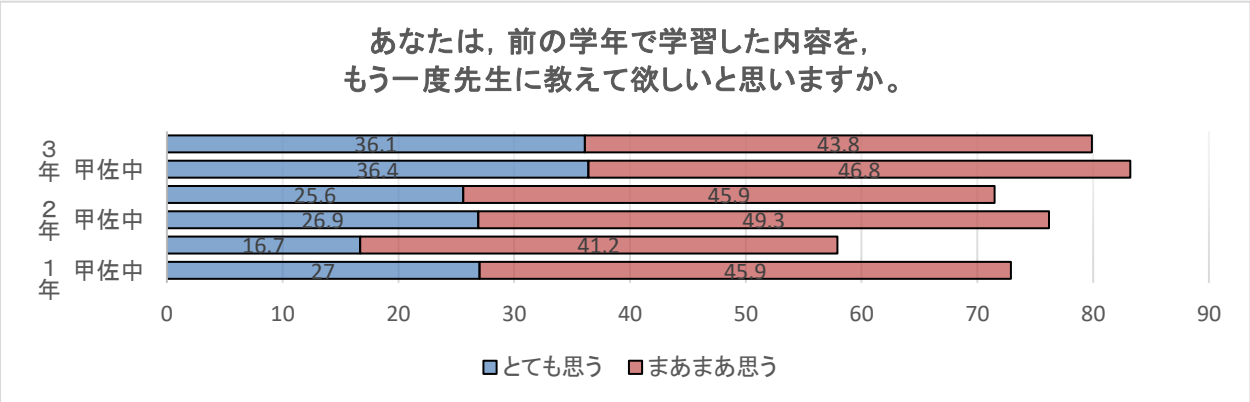
１年生では，今年度の５月と１２月を比較すると，満足度が１１％減少している。これは，昨年度の１年生（現２年生）にも見られる傾向である。中学校生活に慣れる中で，自分の思いや考えを率直に出せるようになり，小さなトラブルが起こったり，人間関係が変化したりするためと推察される。また，中学校の学習内容が難しくなるなどの戸惑いがあるのではないかと推察される。

２　今後の課題

(1) 仮説１について

仮説１については，課題を２点挙げておきたい。

１点目は，１２月に実施した県学力調査質問紙結果から，「前の学年で学習した内容を教えてほしいと思っている生徒」が県平均を上回っていること。各教科等の授業改善とともに，補充学習や家庭学習等の取組などを工夫していきたい。



２点目は，ＩＣＴの活用について，各教科の授業で活用が進んできたが，活用方法や活用場面等について，今後研究と実践を積み重ねていく必要がある。

(2) 仮説２について

仮説２については，hyper-ＱＵの活用を図ってきたが，課題を２点挙げておきたい。

１点目は，hyper-ＱＵの分析方法について，校内研修を行ったのだが，分析の内容理解に教師の差がある。

２点目は，分析結果に基づいた生徒用学習プログラムの整備が必要である。

教師は，何に依拠して生徒と向き合い，教育指導をしているか。いわゆる「勘」や「経験」に頼った集団づくりや生徒指導を行っていないか。

現在の生徒を取り巻く環境は情報過多で非常に複雑なものとなっている。その中で，思い悩む生徒を共に学び，共に生きる集団へと変容を促すことは私達教師の使命である。